
青春は人の数だけ（二次創作 作品多）

伽耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春は人の数だけ（二次創作 作品多）

【Nコード】

N2569Z

【作者名】

伽耶

【あらすじ】

FORTUNE ARTERIALを軸にした多重クロスオーバーISSです。

多作品のキャラクターと一緒に学園生活を送ります。

主人公はオリジナル

ヒロインは250歳

⋮
⋮
⋮

1話 はじまり（前書き）

誰か見てくれると嬉しいです

初めまして 伽耶 と申します

女ではありません男です

好きなキャラクターの名前を使いました。

紛らわしくてすみません…

このような素晴らしいサイトに出会えて感激です

登場させる作品は カードファイト！！ ヴァンガード FORT

UNE ARTERIAL 仮面ライダーシリーズ ゼロの使い魔

僕は友達が少ない Angel Beats！ デモンベイン

俺の妹がこんなに可愛いわけがない バカとテストと召喚獣

まどか マギカ ハヤテのごとく 遊戯王シリーズ 宙のまにまに

KISS x KISS CLANNAD TOLover 妹だけ

ど愛さえあれば関係ないよね 生徒会役員共 とらドラ アマガミ

他多数を予定しています

全作品を読破済みではありませんが、曖昧な部分や不明な部分が出てくると思っています

教師陣や街の住人だけに明記していない作品のキャラクターなどを起用するかもしれませんが、キャラは保証できません…

同じような作品を書いておられる方には二番煎じ三番煎じの作風になりますかどうかご容赦ください

話の筋は大体FORTUNE ARTERIALになります

かなり自己満足な作品になっているかもしれませんが更新は遅いですがよろしく願います

1話 はじまり

ガタン ゴトン

ガタン ゴトン

電車で揺られ間もなく2時間になるだろうか、俺こと御上 卓真は読書にも飽きてきていつの間にか本州と春島を繋ぐ長い連絡橋の外に広がる海原を眺めていた。電車の窓からは微かに見える四国と他の小さな島々。

春休みの真つ只中の電車で混雑するかと予想していたが街の主要部から外れて行くに連れ乗客の数は減っていき連絡橋に差し掛かる時には数を数えられるくらいに減っていた。今乗っているのは俺と同じくらいの年齢の人達でぽつんぽつんと思いつきの座席に座っている。座席の上にある荷物置き荷物の大きさを見る辺り多分全員が新入生なのだろう。

電車の進行方向前方に見える島、春島。

本州から連絡橋片道30分を挟んだ先にある瀬戸内海の多々ある島々の中でも一際大きな島

人口は1万人程の島で、東京や大阪など大都市と比べると都会という物ではないが、田園風景が広がる田舎と比べるとそこまで田舎ではない。守るべき自然が守られ、そして中程度に発達した自然が豊かな都会と言うような物だろう。近代的な大型ショッピングモールもあればまったく人の手が加わっていない自然のままの滝もある。都会と田舎の両面をいいとこ取りしたようなこの春島は全国的に評判がよく、定住したい街として良く話題にもなる。そして、全国でも有名な巨人マンモス校？春島学園？がある。

春島にある学園だから春島学園なんてかなり安直な名前だが評判は

良く、小学、中学、高校のエスカレーター式の学園で、敷地は島の2分の1にも渡り学園内には寮も完備されており、本州から呼び寄せた一流シエフが勤務する大食堂もある。学費などもかなり安く小学・中学などの義務教育期間は私立にも関わらず無料で高校に関しては本州の私立と公立の中間やや公立寄りの学費になる。部活動も幅広く、野球部を始め、果ては温泉部なるものも存在するらしい。学校行事なども学年隔てなく、さらに地域の人々と一緒に行ったりする事が多いので学校内でも地域でも仲間意識は強い。校風は生徒の自主制を重んじる校風でもやりたい事があれば自己申告すると大抵は認可されるらしい。

このような理由で、毎年この学園を受験する者は多く倍率は毎年悲惨な事になる。俺も最初は親に猛反対されたが反対を突っ切り受験に望んだ。受ける前は色々な情報を調べ過去問題を探した。が、何故か最後まで過去問題は見つからず、ならばと思い、受験した人達の感想(?)を探す事にしたがこれも見つからずじまい。これでは対策のしようがないと嘆いているとすぐに受験当日になってしまった。なるようになれと思い、受験に望んだ俺は過去問がない理由を知ることになった。面接だけだったのだ。俺が妙に納得しながら待っている面接待合室の前に案内された。集団面接らしく、緊張したが、部屋に通され面接が始まり最初の質問：俺は答えなかった否、？答えなくて良かった？

「えーと…んじゃあ、右端の黒髪(俺)以外なんでチャラチャラしてんのか理由言ってくれるか？理由で俺を納得させられたら合格な〜」

白衣を着た白髪頭の眼が死んだ魚のような試験官がそう言うと、さつきまで安心しきっていたチャラチャラした人達が凍りついた。

「ん〜？答えられないか？なら黒髪以外不合格。さあ、帰った帰った。おっと…黒髪は俺に付いて来いよ。」

と、立ち上がる試験官。俺も付いていこうと立ち上がるがそこで室

内にいたチャラチャラした人達から批判の声が。

「テメエふざけんなよ！こんな差別じゃねーか！もつとちゃんと面接しやがれ！」

そつだそつだと野次が飛ぶ。しかし、試験官は全く気にせず部屋を後にしようとする。が、その前にチャラチャラした人が立ちふさが
る。

「テメエ無視すんじゃねえ！」

チャラチャラした人が殴りつける。

パンチ白髪の試験官の顔にクリーンヒット。さすがにそれはいかんだると、思い。

「大丈夫ですか！」と俺は駆け寄る。

腫れてはいるが大丈夫みたいだ。

試験官は俺の肩に手をポンポンと叩くと立ち上がる。

「見ただろお前ら、これがこいつとお前らの違いだ。この学園にはな理由のない暴力はいらないんだよ。こいつみたいに想いやる心が必要だ。お前らにはそれがあるか？俺が見た限りじゃなさそうなんでお前ら不合格。じゃあな。行くぞ〜御上〜」
俺は試験官に促されるまま面接室を後にする。

「あの…えつと…？」

「ん？俺の名前か？坂田銀八。銀八って呼べよ。」

銀八という試験官に付いて行きながら質問する。

「あの…？どこ行くんですか？」

「あゝ？理事長室。」

「え？！何で理事長室に！俺なんかしました！？」

焦りながら質問する俺に銀八はめんどくさそうに答える。

「そんなもん俺が聞きてえよ…理事長からのお達しで御上卓真て名前の受験者が来たら通せつて言われてよお…メンドクセエけど連れて行つてる訳、おわかり？」

「はあ…」

なら俺が合格（したのか分からなかったが）したのも理事長のお陰

なのか：内面を評価されたと思ったのに…

「あゝ後な、さっきのあれだけでも。あれはちゃんとした面接結果だぞ。うちの学校変わってるだろ…」

銀八はそう言うのとそれつきり何も喋らなくなった。

気を使ってくれたのだろうか。

そのまま銀八についていき、本校舎の中にある理事長室に到着した。

『本日はご乗車頂き、ありがとうございます。終点春島～春島～お降りの際は忘れものに充分ご注意ください。春島～両側の扉が開きます。本日はご乗車ありがとうございました』

そこで回想は終わる。いつの間にか着いたみたいだ。

俺は横に置いてあるボストンバックを下げ、扉に向かう。

あの後理事長室で何があったっけ…？

思い出せない。

思い出せないと言うことは大して必要な物でもなかったのかも知れない。

まあいいや。並ぼう。

扉の前にはすでに何人か人がいた。

俺が一番後だったみたいだ。

扉が開き、電車から降りる。

改札を出て、少し丘になった所に見える学園を見る。

「結構遠いな…」

空を見上げる。

快晴の青空。

これから始まる新しい日々に期待を抱きながら、

まずは重い荷物を持ちながら学園へと歩みを進めた。

駅から1キロ程は都会並みに色々な建物がある。事前に調べていた自然と都会が調和している感じが見てとれる。

等間隔で植えられた木々のアーケードや端には有名な企業の支店やコンビニ、カフェ、銀行などがある。本屋や雑貨店もあるようだ。部屋の飾り付けなどをする時は利用しようと思いつながら、先に進む。駅前通りから一度外れると歴史深い日本家屋や神社、寺があるみたくて妙にジジ臭い俺は休日に散策するのもいいかもなと思ったりもする。

駅前通りを抜けると生活感の溢れる商店街があった。

駅前通りが都会的な様相ならこの商店街は昭和の時代を描いた様な様相だ。

八百屋や魚屋、肉屋、床屋など色々な店が軒を連ねている。

正直八百屋や魚屋を見たのは初めてだったりするので店頭に並んでいる野菜や魚を見ながら歩いていると、八百屋のおじちゃんが話しかけてきた。

「おっ？その学園の新入生か？」

「はい。道ってここであってます？」

「おう。このまま真っ直ぐ行けば学校だ。そうか、もうそんな時期になるんだな。この島はどうだ？」

「すごい良いところですね。自分こつという街大好きなんですよ！歴史もあって近代的で生活感が溢れる街に憧れてたつていうのもあります。」

「おっ？そうかそうか！それならなによりだ！俺も長い事この島に住んでるが毎年色んな若い奴に会えるし、島の住人もいいやつばかりだし住んでて飽きないな。ここは本当にいい所だ。」「本当にですね。皆さん生き生きしてます。」

「だろ？この島の住人はみんなこの島が好きさ。…よしっこいつ
持ってけ！」と八百屋のおじちゃんにキュウリを渡してくる。

「いいんですか！ありがとうございます。」
野菜は好きだ。

「おっ！そのままかじるのかい！今の若者にしては変わった食べ方
だねえ！」

「野菜好きなので…（笑）」

「そうかいそうかい！そりゃあいい！ウチの野菜はな！あの学園の
食堂でも使ってるから一杯食べてくれよ！」

「はい！」

「へへっ！いい返事だな！学校頑張れよ！」

「はい！ありがとうございます！また来ますね！」

「おう！何か果物でも買いに来いよ！待ってるぜ！」
そうして八百屋から離れ歩き出す。

この八百屋にはまた来よう。そう思いながら。

キュウリをかじりながら歩いて10分、駅から計20分程で春島学
園に到着した。

近くで見ると予想以上にでかく、島の2分の1はやっぱり凄いなと
改めて実感した。

とりあえずボケッと突っ立っていても始まらないので寮に向かう事
にした。

前方に見える寮もこれまたでかく、高級マンションが何棟も立っ
ているようだった。

寮に向かって歩いていると前から一人の少女が歩いてきた。以前、
中学で一目惚れをしたという友人がいた。その友人は今も一目惚れ
した女の子とは違う彼女と交際をしているがそれは置いておいて。

俺はそんな友人をアホだなあと思った。しかし、多分今の俺は世界の誰よりもアホな顔をして前方から歩いてくる少女に目を奪われているのだろう。

腰まで届く美しい金色の髪に正反対の印象を与える黒い着物。着物の所々には花の文様があしらわれている。

美しく整った顔に白い肌。

少女が気付いたようにこちらに瞳を向ける。その瞳は真紅。

身体は小さいが柔弱そうな印象はみられない。それどころかどこか貫禄が見られる。

少女との距離が縮まるに連れ

カラン コロン

カラン コロン

という履き物の音が聞こえてくる。

俺は動けず、立ち尽くしたまま。

そんな俺の前で少女は立ち止まる。

少女の赤い瞳に見つめられる。

「フッフ」

そこでふと思い出す。何故忘れていたのか、この少女を…いや？彼女？を…

完全に思い出した。

受験の日。

理事長室であつた事。

そこで彼女と会つた事。

そこで彼女に再会した事。

そこで彼女と約束した事。

それは他愛もない約束だったのだろうか…いや、違う

「約束通り…頂くぞ卓真…」
襟首を引つ張られ彼女と同じ目線まで頭を下げられた俺は疑問を発しようとした唇を彼女の唇で塞がれた。
微かな血の味。それは彼女の正体を示唆するものであり同時に俺の？人間として？の人生を終わりにする事を意味していた。

いつの間にか気絶していたみたいだ。彼女は居なかった。辺りを見回すが姿は見えない。

今の光景は夢だったのだろうか。

彼女との約束。

あの日理事長室で…いや、本当はもっと前に子供の頃に交わされた約束。

いつかお前を頂く

俺は気を取り直して歩き出した。

すぐに寮のゲートらしい建物に着いた。

受付の人に郵便でもらった合格通知と身分証を見せる。

確認が終わり、部屋のカギを貰う。

俺は一棟（一番手前だ）の303号室らしい。エントランスでカギを差し込みオートロックを解除してから中へ2階に上がると少し広めの多目的広場、奥に左大浴場とかかれた木の板が打ち付けられておりその少し右側に談話室の扉がある。

談話室の扉は両開きで結婚披露宴の会場にあるような物だ。

どうやら2階部分は全て共有スペースになっているらしい
階段で3階に上がる部屋は6部屋あり右から3番目の部屋が俺の部
屋だった。

俺はカギを使い部屋に入る。
カギはカード式で部屋の電気もカードを端末に差し込まないと使え
ないらしい。

部屋の中は当然だが何も無く、引越し業者が持ってきた使い慣れ
ているベッドや家から持ってきたものがダンボールで届いていた。

とりあえず荷ほどきするか。

そう思いながら荷ほどきする事30分。
とりあえず部屋の形は整った。

時間は昼過ぎ、丁度お腹も空いてきたし食堂を利用してみよう。

そう思い立ち上がろうとした瞬間に俺の意識は途切れた。

1話 はじまり（後書き）

後に書くこともさほどありませんが言うことがあるとすれば駄文を
読んで頂き誠にありがとうございます。

こねぐらひですな

2話 めもめ(前書き)

2話です

伽耶さまキャワフ

2話 めざめ

暗い暗い暗い

周りが真っ暗だ。

一体ここはどこなのだろう。

俺は確か荷ほどきをして、腹が減ったからご飯を食べに行こうとして…それで確か眠くなって…

じゃあ今俺は寝ている？もしかやこれは明晰夢？

まあなんにせよ、夢の中で意識がはっきりしているのもちょっと可笑しいが…

「フフ…」

声がした。

振り向いてみるとさっきの彼女がいた。

「早速強制睡眠になったか…意外と浸透が早いな…やはり、私と卓真は相性がいいのだろう…」

彼女は可愛らしく微笑む。あれは現実だった。

「あの…」

「ん？」

正直に言うストライクド真ん中なのだが如何せん正体が未だに不明なので警戒する心もある。

「あなたは誰ですか？」

「…まあ記憶に強力な封印を掛けたから仕方ないとはいえ、悲しいものはあるな…今解いてやる」

「？」

封印やら記憶やらブツブツ言っていると不意にこちらを向く彼女。

彼女の真紅の瞳が俺の眼を見据える。

どこをとつても美しい彼女に見つめられドギマギするが一瞬ののち彼女が纏う空気が一変する。

今は夢の中だ。

実際に風が吹いている訳ではないが彼女の放つ力が周りの空気を振動させているみたいな感じになっている。

あくまで感じた。しかし、確かに感じる。

彼女を恐れ、逃げ惑う空気。そんな感じた。

「思い出せ…卓真…」

彼女が呟き、そして俺は眼を覚ました。

時計を見ると3時過ぎ

先ほど眠りに落ちてから2時間もたっていた。

それよりも、何よりも思い出した事。

幼少の頃の記憶。

そして、理事長室での記憶。

実年齢239歳差の許嫁

千堂伽耶の事を思い出した。

10年程前、毎年楽しんで帰っていた。岡山の祖父母の家。

夏休みのある日、祖父母の家に客が来た。

金髪で黒い着物を着た少女。

名前は千堂伽耶。

彼女は吸血鬼だ。

しかし、俺の祖父母に限らず多くの人々に感謝され愛されてきた。そして伽耶さんも人々を愛していた。

後から知った事だが伽耶さんとうちの家計は親戚らしく、昔から伽耶さんは度々祖父母の家を訪れ、ゆっくりしていったらしい。

そんな時に丁度俺と泊まる時期がブッキングしてしまったらしい。

伽耶さんは構わない構わないと言っていたが祖父母は申し訳ないと思っっていたらしい。

何故なら俺がいたから。

仕方ない事だが子供時代は遊びたい盛りで腕白だ。

そして生来一人っ子だった俺はお兄ちゃんやお姉ちゃんがほしかった。

そんな時に自分より年上の女の子が来た時には大抵照れるか遊ぶかだ。

俺は人見知りをしない子供だったらしく伽耶さんをみた途端に遊ぶう遊ぼうとねだったみたいだ。

伽耶さんも最初はドギマギしていたが遊んでくれるようになった。

一週間後には二人で外を走り回るほどにまで仲良くなっていた。

そして伽耶さんが春島に帰る日に俺は伽耶さんに言った。

「ねえねえかやおねえちゃん！」

「ん？どうした卓真」

「あのね。かやおねえちゃんだいきだからぼくがおとなになったらかやおねえちゃんをおよめさんにしてあげる！」

「卓真……」

子供心に俺は約束した。

「ありがとう卓真……でも私は怪物なのだ。怪物と生きるには怪物にならなければならぬ。お前はなれるのか？私の為に怪物になれるか？」

浅はかな考えだったのだろう。

「なれるよ！おねえちゃんのためなら怪物にだってなる！」俺はそう言った。

「…わかった。なら試してやる。いつか同じ事を聞こう。それでもいいと言うのなら私はお前を頂くぞ。必ず頂く。泣いても許さぬ。懇願しても許さぬ。私と共に永遠を生き、私と共に永遠を歩ませる。いいな？」

頭の中がスッキリしてきた伽耶さんの声が遠くなってくる。

「いつかお前を頂くぞ卓真…お前はこれまで会った男の中で唯一私が認めた男だ。必ず頂く。お前を…」

そう、昔会っていた。

そして、同じ問いを掛けられた。

2話 めざめ(後書き)

書ききったよりも正社員に受かったことの方がうれしい

まだ続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2569z/>

青春は人の数だけ（二次創作 作品多）

2011年12月11日16時54分発行